

「みことばに生きる人」
ヤコブの手紙 1 章 19-27 節

聖書は私たちにこう言います。「御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません」（22 節）と。

「御言葉」は何のためにあるのでしょうか。「神さまは良いこと言うね」と感心するためでしょうか。いいえ、御言葉は、それを実際に行なって生きるためにこそ与えられているのです。でもいったい、どうしたら「御言葉を行う人」になれるのでしょうか。ヤコブは、「私たちがなぜ御言葉を行う人になれるのか」、そして「どうしたら御言葉を行える人になれるのか」の両方を説明しています。

ヤコブは「御言葉を聞くだけで行わない者がいれば、その人は生まれつきの顔を鏡に映して眺める人に似ています。鏡に映った自分の姿を眺めても、立ち去ると、それがどのようなであったか、すぐに忘れてしまいます。」（23-24 節）と言っています。

ここでは、「御言葉」が「鏡」に喩えられています。御言葉は、それに向き合う時、自分の内側にある本当の自分を鏡のように映し出すものだからです。けれども、その御言葉を、鏡で自分の顔をチラッと見てすぐ立ち去る程度にしか見ない時、私たちは御言葉を聞いても行わない人になってしまうと言うのです。鏡の前から離れてしまうと、すぐに忘れてしまうからです。

「自分の顔を忘れるか？」と思うかもしれませんが、昔の鏡はそんなに鮮明ではありませんでした。「ああ忙しい」と鏡をチラッと見ただけで立ち去っていると、寝ぐせがあったことも忘れて一日を過ごしてしまうかもしれません。そして、そのことは、「御言葉」という「霊的な鏡」を前にしても言えるというのです。だからヤコブは、鏡をちゃんと見るように「聞くのに早く」なりなさい、「心に植え付けられた御言葉を受け入れなさい」と教えるのです。

「御言葉の鏡」を前にする時、私たちは罪人としての自分の姿を映し出されて、そのことを真っ直ぐに突き付けられます。ですから、私たちは、御言葉に心を惹きつけられる一方で、顔を背けて逃げ出したくなるということもあるのではないのでしょうか。それで、ある御言葉は鏡をチラッと見る程度にしてしまうのです。「この御言葉は好きだけど、こっちの御言葉はちょっとね」って、自分勝手に選り好みしてしまうのです。その結果、私たちは、御言葉をいつまでたっても行えないクリスチャンになってしまうのではないのでしょうか。

ヤコブは 25 節でこう言います。「しかし、自由をもたらす完全な律法を一心に見つめ、これを守る人は、聞いて忘れてしまう人ではなく、行う人です。」

神さまは、人が罪から開放され自由に生きるために、完全な律法を与えてくださいました。それをイエスさまは、「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くしてあなたの神である主を愛せよ。自分を愛するように隣人を愛しなさい」と教えてくださいました。私たちにとってイエス・キリストの十字架の愛こそが律法です。

それを「一心に見つめて離れない」、それこそが、すぐに忘れないで御言葉を実行していく人になれる秘訣だということです。その時、御言葉自体が、私たちの内に住まれる聖霊と共に働いて、私たちをだんだんと「御言葉を行う人」へと育んで行ってください。もはや、御言葉を実行しなきゃと思うのではなく、自然に行う者へと変えられていくのです。

ただし、一つ誤解のないようにしておきたいことがあります。「御言葉を行うこと」は、「そうしないと救われない」とか「それが救いの条件だ」と言うわけではないということです。聖書はあくまでも「人は行いによっては救われない」と教えています。それ程、人の罪は深いものだし、自らの行いによっては贖い得ないものだからです。だからこそ、イエスさまが十字架の上で私たちの罪を背負ってくださり、「信じるだけで救われる」という、恵みによる救いの道を開いてくださったのです。

それなら、なぜ「御言葉を行う」必要があるのでしょうか。行いによらず、信じるだけでいいのに、なぜまた「御言葉を行う人になりなさい」と言われているのでしょうか。それは、「救われるため」ではなく「救われたから」です。「救いの条件」としてではなく、私たちがイエスさまの十字架によって確かに救われたことの「しるしや証拠」として期待されているんです。だからこそ、神さまは私たちに「御言葉を行う」ことを求められるのです。私たちは、神さまの憐れみに与るものとして、神さまの期待に応える者でありたいと思います。